

「エコライフ」とカーシェアリング

—グリーンカーシェアリングの実験レポート—

福山 峻一

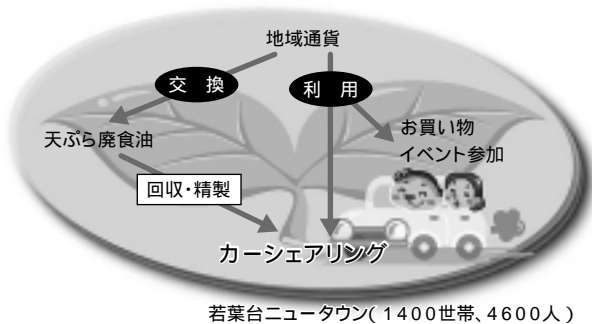
Written by
Shunichi Fukuyama

鳥取発エコタウン二〇二〇

環境保全への意識の高まりを受けて、電気機器の省エネ使用やお買い物袋の持参運動など、エコライフのための地道な取り組みが様々に展開されている。ここに紹介する「グリーンカーシェアリング」もその一つである。

この取り組みは、「鳥取発エコタウン二〇二〇」と呼ばれるNPO法人が中心となって鳥取市南部に開けた若葉台地区と呼ばれる「ユータウン」を舞台に行われた。この地区は市中心部まで約六キロあって、公共交通機関も不便であることから自動車への依存度は大きい。電柱の地中化や全戸の垣根を樹木に統一するなど、環境に配慮した美しい街並みを形成しており、日本の「都市景観一〇〇選」にも選ばれていることもあって、「ここに住まう約一四〇〇世帯四六〇〇人の方々は、総じて環境保全に対する意識が高い。」

この地区の一角に鳥取環境大学が三年前から仲間入りした。住民の方々の交流が進行中で、大学の教員や学生と地元の有志が集い、NPO法人「鳥取発エコタウン二〇二〇」は



【図1】グリーンカーシェアリングの実験モデル

誕生した。『二〇二〇年までに先駆的なハイオクスタウンの構築を』ということを目指しているような活動をはじめている。平成一五年度は「グリーンカーシェアリング」事業の試行実験を取り上げたところ、経済産業省の「企業・市民等連携環境配慮活動活性化モデル事業（環境「ミニシティビジネス事業」）の指定を受け、以下に述べる内容で展開することになった。

「グリーンカーシェアリング」の実験シナリオ

さて、「グリーンカーシェアリング」とはなんだろう？

「カーシェアリング」というのは、複数人で車を共有することにより自動車の走行台数や総走行距離を減らして環境保全に役立てようということだ。実施例はいくつもあるが、われわれのグリーンカーシェアリングはもう少し欲張ったモデルである。骨子は、「シェアする車の燃料には地元で回収した天ぷら廃油（以下廃食油）から軽油代替燃料（Bio Diesel Fuel：以下BDF）と呼ばれるリサイクル燃料を精製して、それを化石燃料の代わりに用

「エコライフ」という生活者価値

いることにする。この方法により、後始末に困る廃食用油問題を解決する。さらに、廃食用油の回収率を上げるために、廃食用油の一定量と等価交換できる地域通貨を導入し、それでグリーンカーを利用する以外にも使える機会をいろいろと設けて、環境コミュニケーション形成の媒介手段にする」ということである(図1)。

グリーンカーシェアリングを、環境コミュニケーションビジネスとして事業化する可能性を占うために、次の四項目についての調査を行い、考察することにした。

カーシェアリングのニーズ 用途と必要性に関する住民の評価。

廃食用油の需給バランス BDFの消費量とその域内での自給可能性。

地域通貨の効用 地域通貨の発行量と用途別の流通状況。

グリーンカーの運用管理方法 運営管理上の課題の抽出。

このようなシナリオの下、平成一五年度後半を使って実験を行うことになった。

実験準備段階でのエピソード

実験をはじめにはいろいろな準備が必要となる。いずれも理事長以下NPOメンバーとの縁で快く引き受けてくださった方が次々と現れ、無事に実験開始にこぎ着けることができた。まず、実験運行に参加していただくモニターさ

んは、実験開始の二ヶ月くらい前から、若葉台地区の自治会の協力を得ることができたため、三〇人の方に参加いただけることになった。人数は期待値よりも少なかったが、皆さん環境への問題意識が高く、また各方面のリーダー格で、良質な実験データを得ることができると主催者一同胸をなでおろした。

各戸からの廃食用油の回収は、若葉台小学校のPTAの理解を得ることができ、集荷日を決めて五、六年生に託して学校に集荷するルートが得られた。また、集められた廃食用油は、精製油が得るべき価格で購入してくれれば、無償で回収してもよいとい

う近辺の事業者さんが現れ、こちらにお願いすることにした。

グリーンカーは地元の自動車ディーラーさんから二台の中古ディーゼル車を無償で貸与いただけることになった。一号車はオートマチックの小型貨物車で、二号車はマニュアルの小型乗用車である。借用直後に、『大いにア



実験に使用したグリーンカー



ピルしよう」と、小学生などに派手な文字や絵を車全体に書いてもらった。これは事前のキャンペーン期間中には威力を発揮したが、派手すぎて、供用段階ではモニターから「乗るには恥ずかしい」と不評を買い、後日少しおとなしいデザインになった(写真)。

最後まで悩ましかったのは地域通貨の役割である。地域通貨と交換してグリーンカーの利用権を得るといのは、「先ずはよし」として、廃食用油は提供するがグリーンカーには乗らないとか、天ぷらを揚げない家庭でも逆に試乗したいというケースもある。このような問題を解決しないと、より多くの方の参加が得られない。論議の結果、次のような整理となった。

今限定で地域通貨「わかば」を発行し、廃食用油五〇〇ミリリットル＝一〇〇わかば。実験期間中のグリーンカーの利用権という換算比率で廃食用油に価値をもたせる。さらに通貨の効用を高めるための策として、地域内の商業施設の理解を得て割引券代わりに使用できるようにする。また、NPOで各種環境イベントを企画し、そこへの入場券としても使えるようにする(次ページ写真)。

車の運行管理方法も重要である。車両を管理し、予約の受け付けや鍵の貸し出しを行ってもらう管理者を地区住民の中に求めた。さすが大規模コミュニティである。自動車好きで元保険会社員で、今は悠々自適という方が見つかった。冬場での車の維持管理や予約に犠牲を払っていたら、返すに、一定額を支払うことにした。車の予約は行き違いをなくすために、運行管理者に電話で依頼するという方法に一本

化したが、予約状況はWebでどこからでも確認できるようにした。駐車スペースは地区内の公共用地一箇所だけとした。

グリーンカーシェアリングの

成立性(実験結果の考察)

実験運行期間中(一月中旬から翌年一月中旬の年末年始休みを除く実質三二日間)実際に一五人が車を利用した。整備ミスによるオーバーヒートトラブルが一件あったが二台のグリーンカーは老骨に鞭打ってよく走った。一号車は三回の利用で二〇四五キロ二号車は三〇回の利用で一六〇〇キロであった。燃費的にBDFで遜色のないことも確認された。車が老朽である点は容赦していただくとして、モーターから指摘されたのは、派手な塗色と天ぷら臭の残る排ガス問題程度で、致命的なものはなく、無事に実験は終了した。行く先々で人々の注目を惹き、地元マスコミに取り上げられたこともあってキャンペーン効果もあった。実験終了後に実施したモーター座談会や地区全戸へのアンケート(回収は一八一通)結果などをもとに、グリーンカーシェアリングの実用性について考察を行った。紙幅の都合もありその中の主要部分のみを紹介する。カーシェアリングの二ス・グリーンカーの利用内容をみてみると、両車とも七割近くが市中心部への買い物など、近辺への数時間の用足し用となっており、この結果から、セカンドカーを各戸それぞれに所有することは得策ではな

いといえる。モーターの意見でも、一台はマイカーとして保有したいが、二台目以降をシェアすることは検討に値するとのことであった。また、住民アンケートでは、七〇パーセント近くの人が、好きな時に乗れるなら、環境によりカーシェアリングを支持すると答え、約四〇パーセントの人が、料金次第では利用してもよいと答えている。カーシェアリングを利用しないとする人は二パーセントにとどまっている。このようないことから、少なくとも若葉台地区のよう



地域通貨「わかば」と100円硬貨

な事情のコミュニティでは、カーシェアリングへの二スは潜在的にあると考えたい。

廃食油の需給バランス：今回の実験期間中に一号車と二号車の合計で四三三リットルのBDFを消費した。これに対し、地区内からの廃食油の回収量は三回の回収で一四五リットルであった。単純計算ではあるが、地区内自給率は約三〇パーセントということになる。別途行った食品製造販売業など県下の二〇〇事業所に対する二ス・グリーンカーでは、回答のあ

った五〇社のうち「ぜひ協力したい」との回答をいただいた事業者だけでも、月間に約四〇〇リットルの廃食油が出るということが判明した。このようなことから、事業規模にもよるが県内で自給自足できる可能性は大きい。地域通貨の効用：期間中に発行された地域通貨の量は、一六八〇〇わかばである。うち五〇パーセントが実際に使用された。グリーンカーに九パーセント、地域内のスーパーや大学の食堂などで二五パーセント、各種イベントに一六パーセントといった具合である。この実績から、魅力のあるメニューを用意すれば、地域通貨が自ら市場を形成し、今までほとんど没交渉であった地域住民間や学校や学生、商店などとの交流の促進剤になることが期待できるであろう。また、商店側も集客の道具としてその効用をある程度認めている。

今後の可能性を感じさせる今回の実験結果から、NPO法人「鳥取発エコタウン二〇二〇」は、グリーンカーシェアリングを環境コミュニケーション・ビジネスとして事業化するための検討をさらに続ける予定である。

◆福山 峻一(ふくやま しゅんいち)

NPO法人鳥取発エコタウン二〇二〇副理事長、鳥取環境大学教授。専門分野は、プロジェクトマネージャ、Webサービス構成方法、情報システム設計方法、DB設計方法。著書は、「地球環境時代のIT読本」(共著、丸善)など。